

文化財 ニュース

34 Autumn 2024

特集

竹久夢二生誕 140 年、没後 90 年記念特別展

夢二式モデルルームへ ようこそ!

— 夢二好みの室内空間 —



「お正月」(『子供之友』3巻1号挿絵) 大正5年(1916)

Index

- 1-3 特集
竹久夢二生誕 140 年、没後 90 年記念特別展
夢二式モデルルームへようこそ!
— 夢二好みの室内空間 —
- 4-5 埋文 News
元禄の区画整理
— 三番町遺跡の段切り状遺構 —
- 6-7 日比谷ミュージアムガイド
近代都市の生活道具 — 暖房編 —
- 8 文化財事務室通信
こんなこともやっています
～子ども体験教室～

特別展 情報

令和 6 年

11月2日(土) ~ 12月15日(日)

開館時間: 月~木、土 10時~19時、
金 10時~20時、日・祝 10時~17時
(入室は閉室の 30 分前まで)

会場: 千代田区立日比谷図書文化館 1 階 特別展示室
休室日: 11月18日(月)

観覧料金: 一般 500 円 大学・高校 300 円
区内在住者・中学生以下・障がい者(付添 1 名)
無料

主催: 千代田区、千代田区教育委員会

協力: (公財) 金沢文化振興財団 金沢湯涌夢二館
千代田区立日比谷図書文化館

※掲載資料で特に記載がないものは全て千代田区所蔵

竹久夢二生誕140年、没後90年記念特別展 夢二式モデルルームへようこそ！—夢二好みの室内空間—

今年は、大正時代を代表する画家である竹久夢二の生誕140年・没後90年の記念の年に当たります。全国各地で夢二をテーマに展覧会が開催されていますが、「龍星閣旧蔵竹久夢二コレクション」を所蔵する千代田区でも展覧会を開催します。

これまで区では、平成30年(2018)、令和4年(2022)と2度にわたり竹久夢二の展覧会を開催してきましたが、今回は夢二を専門とする美術館のひとつである金沢湯涌夢二館と協力して行います。千代田区と金沢、両館が持つ貴重なコレクションを合わせることで、新たな夢二展にチャレンジをします。



金沢湯涌夢二館 (金沢湯涌夢二館提供、2023年撮影)

今回は同じテーマで、金沢・千代田の巡回展となっており、8月から10月には先行して金沢で展示が行われていました。テーマは同じですが、それぞれの会場だけの展示作品も多数あります。

ここでは主に千代田会場の見所について紹介します。



夢二と不二彦



湯涌温泉にて
夢二と彦乃 撮影は不二彦

新たな視点—夢二式モデルルーム—

本展覧会では、夢二が創造し、夢二らしさが伝わる理想的な室内空間を「夢二式モデルルーム」として紹介します。

竹久夢二は明治末から昭和初めにかけて、画家、詩人、デザイナーなど幅広く活動した人物として知られています。特に彼が描く独特なS字ラインの身体に物憂げな表情の女性像は、「夢二式美人」と呼ばれ、時代を超えて多くの人々に愛されています。

しかし、今回の展示では、これまでとは一風変わって、夢二が描く室内空間の作品に注目します。



「晩春感傷」 大正15年(1926)
金沢湯涌夢二館蔵



竹久夢二遺品
鳩時計
昭和9年(1934)以前
金沢湯涌夢二館蔵



夢二・彦乃合作帯 大正6年(1917) 金沢湯涌夢二館蔵



和室の空間 「夢よ浅かれ」(『令女界』5巻8号) 大正15年(1926)

明治末頃から、庶民の住まいの洋風化が進む中で、人々は新たな住空間の理想的な姿を追求するようになります。夢二もまた、そうした世間のニーズを受けて、彼の理想とする和洋の空間を描き出し、世に発信しました。特に印刷作品(雑誌や書籍の口絵・挿絵)では、肉筆の絵画作品では省かれた夢二のこだわりが空間の中に凝縮されており、総合的に演出された夢二の理想的空間を見ることが出来ます。

また、夢二の自宅を訪れた人が、「何処を見ても夢二式ならざるはないその部屋」と驚いたという逸話があり、彼の個性が自身の暮らす室内空間にも表現されていた様子がうかがえます。

従来、デザインや女性像など部分的に焦点を当て、夢二の魅力に迫ることが多いですが、そうした夢二のこだわりを室内空間という面にとらえることで、夢二らしさを再発見します。

金沢湯涌夢二館で所蔵する 夢二作品を千代田区で公開

金沢湯涌夢二館は、平成12年(2000)に金沢市郊外の湯涌温泉の一角に建てられた美術館です。湯涌温泉は、大正6年(1917)に竹久夢二が次男不二彦の病気療養のために、恋人笠井彦乃を伴って、3週間ほど滞在した、夢二ゆかりの地のひとつです。

この地に集積されたコレクションの中には、夢二の様々な作品のほか、不二彦から寄贈された竹久家ゆかりの資料や、笠井家から寄贈された彦乃ゆかりの資料など、貴重な資料が収蔵されており、唯一無二のコレクションとなっています。

本展覧会では、金沢が持つ貴重なコレクションを多数お借りし、皆様に見ていただきます。(学芸員 山田 将之)

こちらにも
注目!!



金沢湯涌夢二館

● ● 展覧会イベント情報 ● ●

1 展示解説

日時	第1回	11月8日(金) 18時(約30分) (日比谷図書文化館文化財事務局学芸員)
	第2回	11月23日(土) 10時30分(約30分) (金沢湯涌夢二館学芸員)
	第3回	12月6日(金) 18時(約30分) (日比谷図書文化館文化財事務局学芸員)

場所 日比谷図書文化館 1階 特別展示室

事前申込不要、無料、先着20名

2 展示講座

日時	11月2日(土) 14時(90分) 講師: 平町 允(日比谷図書文化館文化財事務局学芸員)
	11月9日(土) 14時(90分) 講師: 太田 昌子(金沢湯涌夢二館元館長)
	11月23日(土) 14時(90分) 講師: 川瀬 千尋(金沢湯涌夢二館学芸員)

展覧会の詳細、各イベントの参加方法はこちら



元禄の区画整理 —三番町遺跡の段切り状遺構—

発掘された屋敷の向き

文化財ニュース第32号（令和6年3月刊行）でも速報記事を掲載した英国大使館跡の新たな遺跡では、江戸時代はじめのものとみられる版築（砂と土を交互に重ねてつきかためた層）を伴う道状遺構が発見され、見学者の関心を集めました。この道状遺構は現在の周辺の道とは異なった方角に走っており、17世紀末以前の番町東部の町割りの様子を今に伝える遺構ではないかとみています。

番町東部ではこれまでもかつての町割りを反映した、真北から時計回りに8～10°程度傾いて並ぶ遺構が見つかっています。令和元年～2年（2019～2020）にかけて実施された三番町遺跡の第3次調査では、主に17世紀の生活面であった3面と、それより浅い深さで見つかった18世紀以降の生活面の2面で、はっきりと遺構の並び方が異なっている様子が確認されています。【写真1】（左図）の3面の全景写真では、小穴や切土の多くが右上がりに傾いて並んでいるのに対して、（右図）の2面の全景写真では横並びになっているのがわかります。



【写真1】三番町遺跡第3次調査（左図）3面全景（右図）2面全景 ※両図とも上が北

文献資料では・・・

「御府内沿革図書」に描かれた
番町東部の町割り

19世紀初めの文化年間以降に幕府によって編纂された「御府内沿革図書」には、当時とそれ以前の街並みの変遷が描かれています。このうちの元禄9年（1696）までの様子を描いた図では番町東部には南北の道が並行に走っている様子が確認できます。ところが、元禄10年（1697）になると東部の屋敷88軒ほどが一斉に収公（幕府によって召し上げられること）されています。「東京市史稿」などの記録によれば、元禄10年10月17日に大塚善心寺を火元として発生した火事によって、この辺り一帯は類焼していたようです。

この類焼による収公が番町東部の区画整理のきっかけになります。火事の翌年にあたる元禄11年（1698）11月には南西から北東方向に13軒の旗本屋敷が与えられています。この時、それまでの南北方向の通りや屋敷地が改められている様子が確認できます。新たに設けられた屋敷地の西端には、現在の御厩谷坂にあたる南西—北東方向の通りが設けられました。周辺の屋敷地も元禄11年から14年（1698～1701）頃にかけて次第に屋敷地になった様子が書き上げられています。この時、改められた町割りが現在の番町東部のまちに引き継がれているのです。（学芸員 相場 峻）

①
1673-1696年頃
の様子



○
三番町遺跡
第3次調査地点



段切り状遺構の発掘調査

三番町遺跡の第3次調査3面の遺構の内、北東部で確認された段切り状遺構も現在の町割りに対して反時計回りに傾いている遺構の一つです。この遺構には雑壇状の段切りが施されており、土留めとみられる杭列も発見されました。

出土した遺物の年代などから、この段切り状遺構(774号遺構)は17世紀の前半に構築されたものであることが分かりました。古地図によれば、この時期の旗本屋敷は北側を^{おんまやだに}通っていた表六番町通りに表間口をもっていますので、この段切りは屋敷裏手に設けられたものということになります。この屋敷の西隣や南隣も別の旗本屋敷が所在していたようですので、この段切りは隣家との境として機能していたとみることができそうです。

番町東部は現在でも傾斜の多い土地ですが、17世紀の町割りは千鳥ヶ淵や御厩谷などの周辺の地形に沿っていなかったため、生活空間の中でも起伏を克服することが課題でした。こうした段切りには、平坦面を作り出して居住環境の改善を図る意味合いもあったのかもしれません。

この段切り状遺構は、出土遺物などから18世紀初頭に完全に埋め戻されたと推定され、以後、この遺跡では段切りによる造成が行われなくなりました。



【写真2】段切り状遺構(774号遺構)



【写真3】段切り状遺構(774号遺構)の出土遺物

2
1697年頃の
様子



3
1698年頃の
様子



4
1710年以降の
様子



5
1861年頃の
様子



日比谷ミュージアムガイド 近代都市の生活道具 —暖房編—



今年度冬季の常設展示室V室（近現代ゾーン）では、近代都市の生活の様子とその変化を、暖房器具に注目して紹介します。文明開化以降、欧米の文化が導入され、様々なものが西洋化していきました。社会制度や食生活、そして建物や家具類もそのひとつです。公的機関や大企業が集中していた千代田区域は早くから西洋の文化が取り入れられた一方、人々の暮らしの中では江戸時代からの道具や生活習慣も継続していました。特別展で紹介している竹久夢二の絵からも、和と洋が併存する当時の様子がうかがい知れます。明治から戦前までの暮らしの様子を、暖房に注目して紹介します。



夢二が描いた炬燵（『令女界』6巻1号挿絵）昭和2年

ピンポイントを暖める—和の暖房器具

高温多湿の日本では、一般的な住居の構造は暑さをしのぐための風通しが重視され、部屋全体を暖めることには不向きでした。そのため、ピンポイントを暖める暖房器具が発達しました。行火や火鉢はその代表格といえます。どちらも中に入れた炭火などを熱源としますが、主に家の奥で家人が用いる行火と、客人を迎える空間でも使用され、調度品としての役割も持つ火鉢という違いがありました。

江戸時代からは行火や灰入を木枠の中に入れ、その上から布団をかけて使う置炬燵（檜炬燵ともいう）が出現しました。夢二の絵にもしばしば炬燵が描かれています。

主に寝床で使う湯たんぼは、江戸時代前期には既にかまぼこ型や円筒形の陶器製のものが使われていました。懐中に入れて携帯できる懐炉は、古くは焼いた石を布で包んだ温石などが用いられてきましたが、江戸時代前期に金属製の小箱に懐炉灰を入れて燃焼させるタイプが登場しました。昭和に入ると双方とも金属製



行火（左）と炬燵（右）

のものが普及します。湯たんぽは小判型で波形のついたものが、懐炉は揮発油を燃料とする白金懐炉はくぎんかいるが開発され、広く使用されました。

これらの暖房器具は形を変えながらも江戸時代から引き続いて使用されたものですが、明治以降、新たに普及した暖房器具もありました。それがストーブです。一口にストーブといっても、薪、石炭、石油、ガス、電気など、使用燃料や放熱の仕方によって様々な種類があります。ガスストーブや電気ストーブは燃料の供給が早かった都心部でいち早く普及しました。



ガスストーブ（手前、右奥）と電気ストーブ（左奥）



夢二の描いた暖炉（『子供之友』13巻1号挿絵）大正15年



明治宮殿（明治21年竣工）謁見所（表宮殿）の暖炉

文明開化以降、社会は古くからの和の文化と新たに入ってきた洋の文化が入り交じりながら徐々に近代化していきました。例えば明治宮殿でも、表宮殿ではセントラルヒーティングである温風暖房を、公用室や事務室では暖炉を用いていましたが、私室では依然火鉢を使っていました。

特別展と合わせて、和と洋が入り交じる近代の暮らしの様子的一端を感じていただければ幸いです。（学芸員 岩城 晴美）

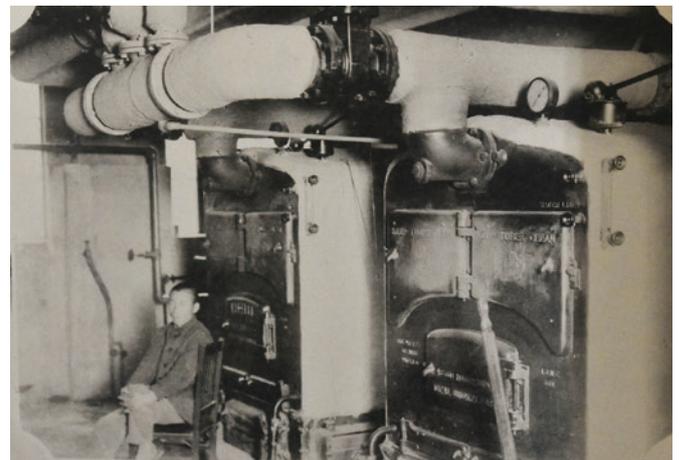
部屋全体を暖める一洋の暖房設備

明治以降、千代田区域では官庁やオフィスをはじめとした西洋風の堅牢な建物が数多く建てられました。それらには当時の最新設備である、部屋全体を暖める造りつけの暖房設備も導入されました。

暖炉は薪や石炭を焚いて室内を暖める設備です。その装飾性の高さから建物や部屋の格式を示すものともなり、ガスや電気が普及した後でも、装飾のために造られることもありました。

セントラルヒーティングは一箇所で作った伝熱媒体を各部室に送ることで室内を暖める設備で、中央暖房とも言います。石炭やガスを燃料にボイラーで発生させた温水や蒸気、温風をラジエーターなどで各部室に放熱する方式が一般的です。気密性の高い鉄筋コンクリート造の建物を効率的に暖めることができました。

これらは主に大規模な建物に導入されましたが、区内では山口萬吉邸など、個人住宅での導入事例も早くから見られました。



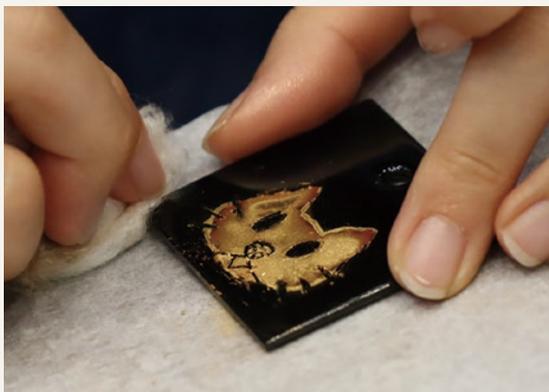
旧芳林小学校（昭和3年竣工）のセントラルヒーティングのボイラー

こんなこともやっています ～子ども体験教室～

日比谷図書文化館文化財事務室では、千代田区の文化や伝統、文化財保護への関心を高めることを目的に小学生とその保護者を対象に、子ども体験教室を実施しています。昨年は「手描提灯をつくろう」と「蒔絵キーホルダーをつくろう」を開催しています。



「手描提灯をつくろう」作業風景



「蒔絵キーホルダーをつくろう」作業風景

「手描提灯をつくろう」は、江戸手描提灯文字入れの技術を引き継ぐ安政元年（1854）創業吉野屋商店の協力のもと、あかりの歴史を学び、提灯の文字入れなどを体験する教室です。

「蒔絵キーホルダーをつくろう」は、東京藝術大学大学院文化財保存学専攻教育研究助手の玉川みほの氏の指導のもと、江戸時代に区内でも行われていた漆工芸の伝統技術である蒔絵を体験する教室です。

参加者からは、「伝統技術の実演を見ることができ、また実際に技術を体験することができて良かった」といった感想が寄せられました。今後の開催予定は広報千代田や「千代田区の文化財」ホームページをチェックしていただければと思います。

（学芸員 山田 暁也）



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
 東京メトロ ●千代田線
 ●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
 ●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時
 土 10時～19時
 日・祝 10時～17時

文化財事務室 月～金 10時～18時



文化財ホームページ

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
 最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日 毎月第3月曜日

文化財ニュース 第34号 (3,000部)

発行日 令和6年10月31日

編集 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
 〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
 TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
 https://www.edo-chiyoda.jp

発行 千代田区教育委員会

印刷 日本印刷株式会社